4
232

二舍時雨の笠森

特49
895



## 一舍時雨の笠森小序

れ稲荷へ詣へ和安永の間本くしと茶亭の娘お仙が容色の優れたるに因ものなり然るヨ此笠森稲荷は上野櫻木町なる壽寿院に移されて陀枳尼天と稱は變れと猶信心者の絶ざる由にて毎年九月廿二日を大祭とし併せてれ仙が追善をも營む有志のありとか聞く此れ仙が因果物語は故乾坤坊了齋が著述に成て講談師の演ずる事久しけれど附會の妄説ヨ近ぐ出て信ずるヨ足ざりしが余現ヨ攝州有馬の温泉より大坂府下に再遊し笠森れ仙が實傳なりとて聞得たる一話あり此も亦實記ととるヨは足ねど聊か信ずる所なきにあらねば此頃養壽院に於て笠森祭の改革あるに際し六七回の續き話しヨかくはものしぬ

錢あげて鳥渡拜むでお仙の茶屋へトいへる小唄の流行せしは明

内閣文庫

# 一舍時雨の笠森

## ○第一輯

心ある人に見せばや攝津國の難波の春の夕景色賑はふ中も身の秋は冷愁き形の夫婦連れ未だ當才の女の兒を懷ろにして天神橋の北詰の辻に彷徨互ひよ手よ手を採合て「汝は此攝州の能勢郡山内村の百姓三次郎殿の妹なれば村内には親類や懇意の者もある筈なれば是迄の了簡違へを詫言して此兒を連れ何方へなと縁付て末長ふ生存へ己が菩提を吊ふて呉りやれ此忠右衛門は播磨國姫路在の產れにて親の内にさへゐたならば斯零落もしまいものを伊勢參宮とて家を逃亡放蕩惰弱に遊び歩行き餓死にも成るべきを僅の縁を手便にて山内村の小賣酒屋勘兵衛どの丶世話よなりぶら〳〵遊んでゐるうちよ不圖した事で轉び合ひ妊娠させて詮方なさに兒の手許の金を偷ませ此大坂へ連て退き俱に世帶を持つ氣で有たが都會の街の珍らしさに這許や彼許と遊び歩行て家をも持ず僅の金は遣ひ果し八軒屋の安泊にゐるうちよ安產したは女の兒是此通り美しい縹致ながらも着せ換る布子さへない夫婦が難澁寧此兒を何處へなと捨て死なふと覺期して宿は出たれど捨兼て愚痴な事だが親子三人此川中へと思へども淺い流れでなまじひに死ずば却て恥晒しゆゑ我と我身に殺生の罪を犯い[illegible]

詫言し此兒を養育してくれと男泣に伏沈めば歎きは同じ女房れかのが「此兒を殺すは不便ゆゑ豪家らしい家の門に捨て一所に死ませう兩親のある身ではなし金を偷むで立退た兄さんの家へ何として今更阿容〳〵戻られやうぉ前が首を縊るなら私も俱に同じ樹に首を釣して永來は必ず一ッ遊の上に住みお仙が人に拾はれて育つに草葉の陰ながら見て樂みにしませうと愚痴の限を繰かへし又潸然と泣沈む無分別ころ憫然なれ

## ○第二輯

「我兒を捨て死ぬといふ其了簡は悪からふと兩人が歎きの背後より詞を懸られ駭然て見かへる後に立たる男が「仔細は何やら知らねども通り掛りの此往來若い男と女の泣聲ハテ訝しいと軒下へはいつて二人の話しを聞ば氣の毒至極な今の身の上しかし如何程難澁しやうと死ぬといふのは不了簡死だ積りで苦しむだら夫婦の者が共稼に女の兒の一個ぐらゐ育られないをもあるまい已も昔は江戸出生ぢや〳〵馬の六藏と異名を取つた蔦破戸黨博奕と女に身を果し中國四國をふらついて此大坂の大工となり松嶋の娼妓に馴染夫婦となつて十年以來疊町に住でゐるが善く相談をして見たら死なずとも濟む方も立ふ兎に角にも已と一所に今夜は内へ來るがいゝのサ「身に一錢の蓄へもなく今死ぬといふ夫婦親子を助けて下さる御心切は流石に江戸の俠氣な貴君に沒目に懸りましたは地獄で佛



に會ふたも同樣何分よろしく願ひますおかのもお禮をいはぬかと夫婦もろ共兩手を合せ六藏を伏拜めば「イヤ〳〵其樣にいはれては却つて已が恥かしい假令何國の者だとて今死ぬ人を見殺しにして置者があらふかへサァ〳〵一所に來なせへと親子の者を伴ひて疊町の我家に戻り女房お柳に斯々と仔細を語りて引合せおかのが乳の多きを幸ひ島の内の商人の家に乳母奉公を勤めさせ其給金を里扶持にしてれ仙を在の農家へ預け忠右衛門は泥工職の泥洩に雇はれて細くも其日を消光らるゝ身となりしかば忠右衛門は六藏の恩を感じ一所懸命に勤るにぞ夫婦はいつしか萬のことに不足を覺ぬ迄になりれかのも奉公の年季を果しれ仙を家へ引取て同所に小さき借家を求めたつともなしに大坂に五年春秋を過せしが月に村雲花に風物には必ず障り有て此六藏が女房は松島の廓にて安娼妓の果なれば累年黴毒に苦みて臥てゐる日のみ多かりしが此程より枕も上らず厠へさへも行兼れば忠右衛門の妻れかのは爰ぞ日頃の報酬と六藏が家に來て夜さへ眠らず看病に力を盡せど全快せず半年餘りを過し、かば長き看護に倦果たるうへ六藏も又妻れ柳が病身ゆゑに二三年來獨寐の閨淋しきにおかのはもとより多情なる性なりければ何時しか江戸出産の六藏が俠氣の風に田舍者の忠右衛門を比較ては左ながら天と泥洩の身の賤しさが忌まるなり恩を受たる六藏が挑むを強て固辭もやらず遂には深き中となり重き病に臥惱れ柳が

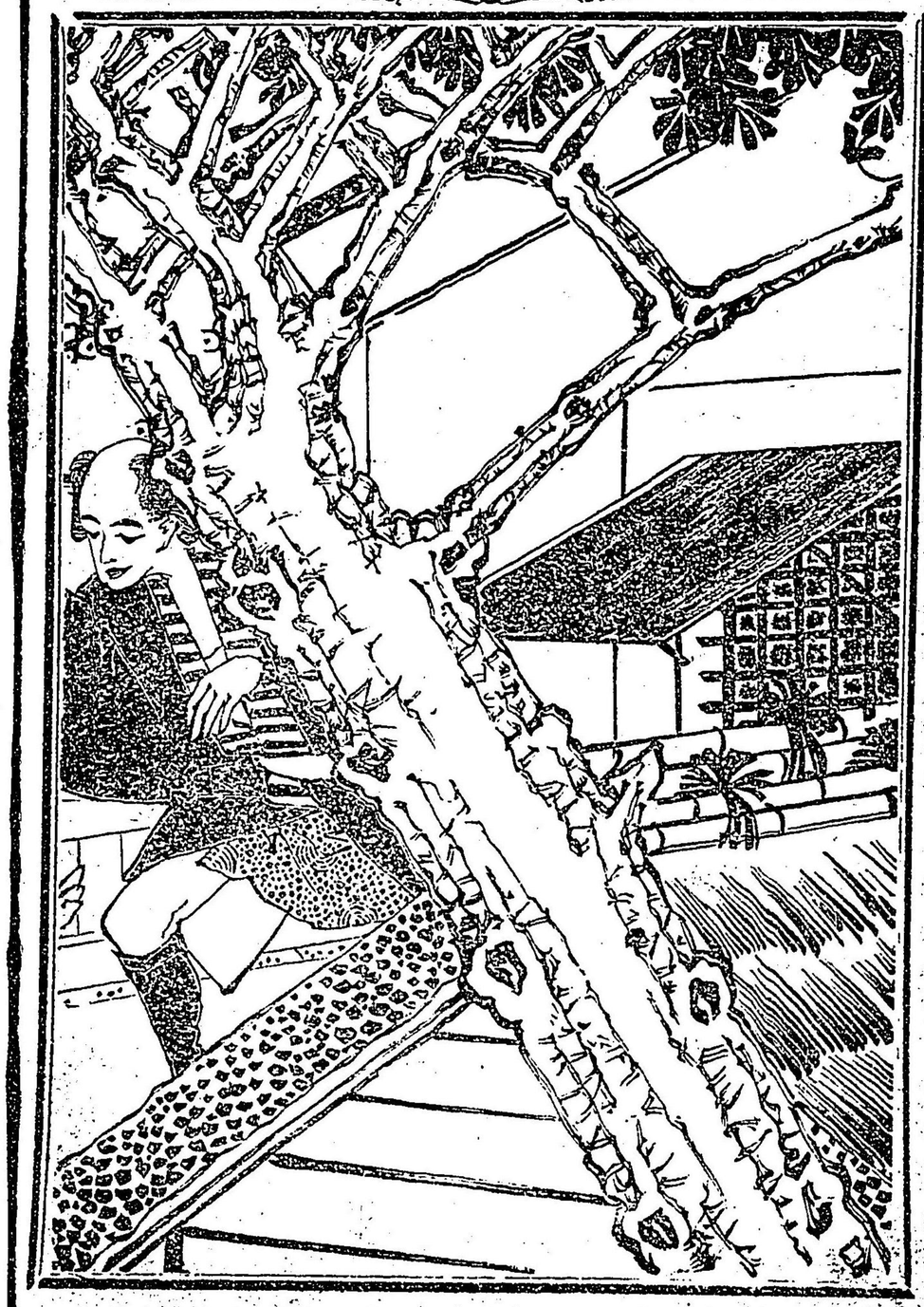
前をも憚らず戯れ娯む水性は七人の子をなすとても心の免し難かるは浮淫多淫の婦人よろ

## ○第三輯

人の心を飛鳥川の淵瀬よ譬へし水性の婦人の所業は憎むべしれかのは故郷を走りしより生死も倶にと誓ひてし良人の事は忘れし如く彼六藏と姦通して心の儘よ娯まむと密々に言合せ家財を殘らず賣てかし六藏は病臥を妻を置去よしおかのは夫とれ仙を捨て何國ともなく逃亡せしかば忠右衛門お仙は大きに驚き憂ふれども又如何とも詮方なきに病臥お柳は之が爲に怒り悶えて苦痛を増し六藏が逃亡せしより第三日目よ死去しければ忠右衛門は是非なくも六藏が一端の恩義よ酬て近隣の者と相談し葬式を執行ふよ塵も遺さず六藏おかのが物掻浚ひて走りたれば佛事の諸費も忠右衛門が幽けき稼ぎの内より支辨し其後は娘れ仙が成長のみを樂みに頻に勉め勵みしが忠右衛門は此一條よ只管心配せし故よや何時ともなしよ虚症となり家業もならで休む日多く之が爲に有といふ程よもあらぬ身代は漸次〳〵よ傾きて末如何にとも詮術なければ從前の如く身躰の健康よなるべき樣はなきやと曾ふ人毎に尋ぬれば同國有馬郡なる温泉に浴すれゞ衰弱したる病症は忽地よ同復もとの敬へに任せて四五週間有馬に入湯したる後故郷の播磨よ立歸り職業を轉ぜ身



を立んと家財を賣て路費を整へ家を返還て住馴し大坂の街を立退しは寶暦八年戊寅八月下旬の事なりし將其頃は有馬の湯も今日の如き賑ひならねば六甲山の溪間は人の往來も稀よして晝さへ寂寥く生繁りし木蔭に脊負しお仙を下し「時候は涼しくなったれど未〳〵殘暑の餘炎あれば汗が着服の上まで徹つたマア一憩して行ふと最前市で買つて來し菓子の殘りを袂より出してお仙に與ふれば「れまへは近頃病氣ゆゑ常でも斯な嶮しい山へ登るは惱勞からふに私を負ふては猶の事是から先が遠くもなくば手々を曳れて歩行ふと幼稚いながらに父を思ふ孝の詞の頼母しく親子が慰め合ふ折から崖よ聳ゑし熊笹の中押分て顯はれ出たる雲突如き大男二個が何か膣肝しつ忠右衛門が前後に立ち「富民らしくは見ねども西國順禮には優る湯治の客の懐中に多少の金は有る筈なり其紙入にいふ迄もなく娘が着類も共々よ渡して裸躰になつてしまへト聞く忠右衛門は身を震はせ「温泉の客と仰やれど覽の通り窶々しい親子連の難澁者こゝで裸躰よ成ましては身の振かたが付ませぬ何卒免〳〵と詫れど聽ぬ兇賊は忠右衛門が帶よ手をかけ「何程泣ても叫いても我々二個に睥睨れたらかなはぬ所と覺期してきり〳〵裸體に成てしまへと二個一度に立かゝり剣んとするを幼稚心よ止んとお仙は身をあせり一個の賊の右の足へ組れば賊は氣を焦ち「邪魔ひろぐなと蹴飛せば路幅狹き嶮岨の崖際踏堪ふべき力なければ幾十丈



なる谷底の水音高き下ヨ陷生死も知らず成ヨけり

## ○第四輯

其頃豊前中津の領主奥平家の物頭ヨて勘定方をも兼勤する今村丈之進といへる武士は大坂の藏屋敷へ公用にて滞在せしが持病の惱みを治せんとて有馬の温泉に遊ばんと素より忍びの事なれば僅に小者二人を從へ山駕ヨ乘り來かゝる途中六甲山の半腹に赤裸にて斃れし男はまさしく山賊なんどに出會ひ氣絶したりし者と見ゆれば供の者に介抱させ印籠の内よりして起死の藥をとり出し口ヨ含ませ大音ヨ「オヽイ旅人〳〵」ト呼生れバウンと一息つきながら身を起して溪間を覗きふ仙〳〵と呼はりて正体もなき景狀なれば丈之進は背後より「ヤレ浮雲いと抱き止め「旅人心を慥に持て察する處賊難ヨて裸體にされた者とは見ゆれど溪間を覗いて女を呼ぶは狂氣したのか如何した者ぢやトいはれて喚と泣出し丈之進が前に兩手を突「何國の旦那か存知ませぬが吾儕は幼少の娘を連て唯た今追剝に出遭ましたゆゑ取れまいと爭ふうち親を思ふ兒心ヨ盗人の足に縋り詫るを邪魔だと蹴返す拍子に此崖の下へ蹴飛されたを見るに愕り心も消入り思はず正氣を失つて瞑目てしまひました其ひまに斯う裸體にされ聊ばかりの旅荷まで奪取られてしまふたを夢中で知らずに居ました所へ折よく旦那樣が通行でば介抱ヨ預つた陰で蘇生致ました其



謝辭さへ申上ず癲動して居ましゆゑ吾兒の安否を心配し失禮ばかり致しました不調法は幾重にも冷免なされて下されと語るを聞て眉を顰め「夫は一方ならぬ心配在下が今一足早く參り合せたら此災難には遭せまいに殘念至極とはいへ娘が生死の際底には水音ばかりして數十丈なる此崖下駕丁共にも下られねば兎に角有馬へ着したうへト云つゝ從者を見かへりて「其方は寸刻も早く先へ走つて有馬に赴き村役人に仔細を語り人足をかり集め此溪の下を捜させよ主人ゝ跡より參るとヤせはやく〳〵と急立遣れば忠右衛門は涙の間より段々の御厄介有がたうござります如何せ存命では有ましが死顔なりとも今一目娘に會たふござりますと喞つを頻ヨ慰めて「此場ヨ立てゐたればとて娘が上つて來るでもなければ此溪から落された目標ヨは是斯と白紙を割て松の枝に幾つとなく結びつけ斯して捜せば生死ともヨ分らぬといふ事は有まい兎にも角にも裸體では歩行まいから在下の臥被を一枚進せやうと一個の從者に骨柳を解せ引かけさせる單物に幾重の情か籠るらん

## ○第五輯

有馬名物竹細工人形筆を購求ませと西の坊の奥二階へ賣込に來る糸細工の美しいのを見るにつけお仙がゐたら欲がるであらふと思へば胸塞り泣顔墮れゐる忠右衛門が脊後の方の襖をあけ手拭ひ提て風呂場より歸り來れる丈之進は煙草盆を前にひかへ「知らるゝ通

り昨日から手に手をつくして捜させても死體も見ぬは猛獸の腹を肥やか左もなくは命わつて人よ拾はれ何方へか連行れしか右よも左にも足下の歎きは最も至極の事なれど是も所謂前世から定まる緣と諦めて運よく再會する迄い昨日を娘か命日とし思ひ切てしまふがよいと懇ろよ慰むれば「種々御恩に成ました上言を分ての其れ諭し親子の緣の薄いのと諦めては居ますが昨夜も申上ます通り薄命のみ打續き女房を失ひ子を殺し家財を賣た資本まで昨日奪れてしまふたれば最此上は一文なし此体では恥しくて故郷へも歸られませねば圓頂に成て雨水行脚の廻國をし娘が跡を吊ひますと又泣沈めば「ア、コレ〳〵夫は甚しい不處存至極未ざ初老にもならぬ男が歎きに昏て乞食坊主にならふ抔とは臭屈千万乞食よなつた了簡でまた怠らず稼いざら家を持妻子も持る資本ぐらゐは忽地出來やう雌々しく歎くは愚知の迷ひ在下が三週間當地よ逗留するうちは此地に居て緩々と娘の在所を捜したうへ彌知れぬ其時には本國中津へ同行して身の立やうよしてやる程に心配なく万事を已に任せて慥と憐み深き武士の情に勵まされ只顧に其恩を謝し同所よ足を止めてより二週間を經たれどもれ仙の行方の知れざれば遂よ中津へ伴はれ今村が屋敷の内に食客となりて家從の如く召使はれてゐたりしが其年の冬同藩の足輕松島市助といへる者病死して嗣子なかりければ丈之進は忠右衛門が正直なるを見ぬきたれば人を以て



媒酌させ松嶋が妻の家へ入夫させ二代目市助と名乗しが夫婦の中合ひ最睦ましく其翌年の秋に至り女子を出生させければ夫婦が悦び一方ならず其娘の名をお櫛とよひ寵愛大方ならざりしが忠右衛門の二世市助はれ櫛が十二の春の頃風邪の心地よ打臥て日を經るまゝよ病ひ重り終よ果敢なく成たるが終焉の際までお仙が事を言出ざる日のなかりしは親子の愛着左もあるべし

## ○第六輯

生者必滅會者定離の理は悟りても諦めのつかぬ歎きを束の間よ七日〳〵の忌日も經ち百箇日さへ過ぬれば松嶋の妻おかよよ再び入夫をすることそよけれと進る者も有しかど松島の妻おかよは近村の農家の女よて年若き頃嫁し來り前の市助よ別れしより今村丈之進が媒妁にて忠右衛門を入夫とし子までなしたる中なりしが兎角よ良夫と緣薄くて今又後の市助にも別るゝ不幸に遭しより浮世の果敢なき道理を悟り再び良夫を迎ふるを辭しおかよが實家の從弟なる某氏を以て養子とし姿は換ねど墨染の法衣を着たる了簡にて二人の夫の墓よ詣で世を心安く送らむとする其節操を丈之進も愛憐みて活計を助くる事も少なからねばおかよは日毎よ今村の家に通ひて縫針の業を勉めて酬いとせり斯て四五年の星霜を送りしが此今村丈之進は多くの子等を持たりしに其嫡男を丹下とて年齢二十に滿ざ

るが藩に英敏の聞こえあれば未だ角髪の頃よりして童小性に召出され公の寵遇厚かりしかば今年は江戸參勤の供に召連らるべき命に寄り中津を出立そるに臨み公よりの内命まて まだ幼童も同穢なる丹下を東行さするなれば活計其他衣類の世話を自宅ゑ於てとる者なくんば在勤中も不自由なるべし依て尋常の勤番士と區別し下屋敷ゑ住はすれば事に馴たる家婢なぞを召連るとも苦しからず定府の者と一般ゑ見做尽そべしとある特別の恩命を丈之進夫婦は只管に難有がり悴丹下が附人には甲乙といはんより市助が後家おかよこそ屈竟ならんと思ふよりおかよをば説勸て江戸へ下すにお樗も共ゑ江戸見物をしたしと願ふを聽入て松嶋母子を丹下ゑ添へ江戸へ下して奥平家の別莊に住はせしが丹下は親の手許を離れ遠き旅寐の徒然に同居してゐる松嶋の女れ樗といつしかに割なき中と成ゑける

編者種彦曰す此物語小説稗史の類ひなれば此編までは所謂腹緑といふ物の如くにてお仙が事ゑ關係なきに似たれど後輯よりは話しを轉じお仙が履歴を説出せば譚の枝葉の錯雜するを看客咎め玉ふこと勿れ

## ○第七輯

江戸谷中天王寺の境内福泉院に安置そる處の笠森稲荷大明神と稱するは徳川家康公濃州長久手陣のとき腥物に惱み賜ひしを旗下の士倉地甚左衛門といへる者其陣營近き立木觀



音に立願せしかば忽地ゑ平癒あらせられしに依て江戸入城の後甚左衛門が邸を谷中に賜ひしかば甚左衛門は立木の觀音を以て笠森稲荷大明神と崇め祀れりと同寺の緑起に記したる此稲荷ゑ立願のはゑめには土にて造れる團子を供へ本復の後拜賽に米の團子を供ふることそ此は之土ハ稼穡の基にして春は土をうつて耕し滿願は豐熟の秋ゑ等しとの意なりとそ此稲荷は瘡毒一切の難を救ふの誓ありて又瘡毒稲荷とも稱し靈驗利益著然ければ元祿年中より天明の頃まて流行して明る旦より暮る夕まで繹繹として參詣絶ず之が爲ゑ土地の潤ひ大方ならずして華表の内ゑは夥多の茶屋軒をならべ土と米との團子を鬻く中ゑ鍵屋のお仙とて容色優れし美人あり當時の番工鈴木春信初て東錦繪ゑお仙が肖像を畫きしより春信が妙手を世に知られた仙が美名はいよ〳〵高く腥物に惱まぬ若人までも遠く來りてれ仙が茶亭へ憩ふを以て樂みとす去ればれ仙が懸茶屋は稲荷とゝもに繁昌せり（福泉院廢寺となりて後今の養壽院に遷されたるとは後號ゑ載す）此れ仙が本宅ハ三崎町の裏長家ゑて父は鍵屋太兵衛と呼れ母は早く世を去て父子二人の暮しなるが太兵衛は强慾多淫ゑして六十餘歳に至るまで賭博を好み色ゑ耽り殊に近年癲癇に罹り髪は班に拔落て面は熟せし桃實の如く指以て押ば濃汁を出す其臭氣の甚しければ人交りも成難きを眞い者身知ずとて飽まで大酒を飲うへゑ毒ある魚をも厭はで喰ひ夜は谷中の下等妓樓

よ遊ばざるとなかりければお仙が衆くの貨を得れども塵も殘さず遣ひ果し貪つて飽事を知らぬ强慾非道の痴漢なれば近頃病氣の重くなりて戸外へ出るをさへならねば遊里よ至られざるを怨み娘れ仙を頻に挑む倫理を知らぬ擧動をお仙は只管歎き悲しみ斯淺猿き行ひも難病のなす所なればと笠森稲荷に祈願を籠め朝々に水を濯て父が平癒を念じゐる其孝心は憐むべきも太兵衛は多年の惡業なれば稲荷も見捨玉ひしにや治すべき体はあらざりけり

## ○第八輯

木の下は汁も鱠もと吟じたる上野の櫻盛過ぎ日暮の里飛鳥山と花見よ集ふ人々は笠森稲荷に參詣す其賑ひは大江戸の金一升に泥團子米の團子の圓め人を雇ふ繁忙しき黎明より福泉院の門前に群て往來の手の内を乞食仲間もろれ〳〵の禮議はあるか年頃も五十に餘る無宿の老婆を中に取圍み女乞食が異口同音に「ヤイ〳〵汝は遂に見馴ぬ旅乞食と思はれるが語も如何やら上方訛り優しさうな狠ものこの笠森樣の御門前へ吾輩が毎日出るにはろれ〳〵の交際もして他人は入ない規則であるに誰に一言斷りもなく鳥居の下の善い場所へのめ〳〵と出しや張たは一体如何いふ了簡だ太膽しいにも程があるなアお困さん「オヽお久さんのいふ通り已が心よ比較て吾輩も同宏宿なしと思であらふが田舍の乞食と江戸の乞食は憚りながら譯が違ふ是でも立派な支配もあり又ろれ〳〵に堂前とか日暮里とかに家が有て仲間交際其外とも堅くしてゐる營業の繩張内へ斷りもなく誰が許して店を出した「成程私は仰やる通り旅乞食の宿なしゆゑろんな掟のある事も存知ませんで此境内へ出ましたのは重々の無調法とはアながら私も實は腹からの乞食ではござりませねど不圖した了簡違ひから旅稼の女郎に成果是此通り惣身に黴氣を發し難澁して笠森樣のゆゑ利益を願ひがてらに鳥居の前へ出たのもゆゑ仲間よ掟があるのを知らぬゆゑ早速他へ行ますから免なされて下さりましと詫れば一個が眼よ角たて「ヤイ〳〵〳〵此糞婆め汝れ今何と吐した已違はろれ〳〵よ頭も仲間も有といつたを腹からの乞食と輕侮し我一人が腹からの乞食でないとは能く當こすつた語も上方才六なれば公家の娘か何だか知らぬが同じ鳥居の前よ出て錢を貰へば同じ乞食だ夫じやに依て乞食仲間の規則の通り此境内へ店を出すなら仲間中へ振舞金の一分を爰で受取ふか「イエ〳〵如何して私等に一歩のれ金がある程なら此苦しみは致しませぬ又腹からの乞食といつたは何の氣なしの身の上咄し決して〳〵貴孃方に當付るのなんのといふ「エヽ喧しいべチヤ〳〵と長い辨駁聞てはゐられぬ振舞金の一分が出せずば是も仲間の規則通り足も腰も立ぬほど打て打て擲のめさふか「旅乞食の斯な婆に跋扈れて堪るものか「此稲荷樣の流行よ付て沙蟲錢

でも盜ま來たのか活しやあ〳〵とした奴だ「オヽ然いへば此頃中御別當所ま仕舞て在た御褒錢の金箱が紛失したといふ事で吾輩迄も疑られたが大方斯な悪い奴の所爲であらふ一マア何にしても金がなくゞ毆つて懲セがよからふと詫るも聞ず大勢の女乞食が立懸り握り拳の雨霰さらでも痛む身體の腫物に惱み苦みて聲も得立ず手を合せ伏拜む外ま詮術も涙ま昏るを見兼てや人ま情を懸茶屋の菱寶押明け馳出るお仙い聲を振立て「コレ〳〵皆の衆御境内で其亂暴は如何したものだ夫ろの乞食の仲間振舞受取て行むせと投出した る一分銀殊に社内で顔役のお仙が鶴の一聲に女乞食は一同に身を縮ませて扣へゐたり

## ○第九輯

其時れ仙は徐々と女乞食の傍へより「最前から聞てゐれば振舞金のないもの請求て可愛さうま年寄た者に手ごめな事して怪我でもさせたら一通りでは濟ぬぞへ振舞金さへ取たなら言種は有まいから早く御門の外へ出て神妙にしてゐたがよいといはれて乞食は異口同音に「姉さんの仲裁なら金に關事る事ではない毎度れ餘物を下さる姉さんから此金を頂ては濟ませんと返すをれ仙は突戻し「其れ金は新入の此姥さんに遣た金れまへ方が不用なら其當人へ返すがよいと叱たしなめ追立る跡に殘りし旅乞食はれ仙が前ま兩手を突き「貴君がれ出なさらねゞ私は此で死ぬ所を止て下さるのみならず金迄出て下されたれば翌日から命が繋げ升お優い恩召は難有とも嬉いとも御禮は辭ま盡せませぬと涙ま昏て悅べば「見ればお前も全躰へ瘡毒が發して難儀で有ふ吾儕の親父も難病で困るま付て想像る笠森樣を信心して早く全快するがよい旅の乞食のいふ事だがれ前は何國の產だと問懸られて涙を拂ひ「お話し申も恥かしながら懺悔話を致しますれば私は攝州能勢郡山内村の生れなれど同村に住む男と一所ま大坂へ逃亡して女の子を產だれど親子が餓ま迫つたゆゑ壓死なふとした所を疊屋町の大工職に助けられたが身の仇にて其子は攝州嶋下郡眞上村へ里ま遣り夏夫は泥工の手間取まなり漸々に取續くうち其大工職の女房が舊娼妓ゆゑ黴氣で惱み長〳〵臥てゐる看病に行たが悪い緣の端先の主人と轉び合ひ私い夏夫と娘を捨て主は病臥ま女房を捨て家財を集めて賣拂ひろれを路用に江戸をさして逃亡した其途中東海道荒井の驛で主は遽ま時疫を煩ひ死なれた跡の詮方がなさに駿府の二丁街といふ切店の娼妓になつたも病氣で臥てゐた人の女房を置去にさせた報いかして黴毎に惱むで勤まらず其後諸方を吟行てとう〳〵丐兒ま成果ましたト聞く事毎に身ま當る話にれ仙は膝を進め茫然として聞ゐたり

## ○第十輯

れ仙は乞食の懺悔話しを聞ま涙の先立て偖は吾儕の幼稚とき別れし儘ま生死も何と雖波

の地を離れよし悪き道に走るとも乞食に迄零落しか此は淺猿しや我こゝは質の娘のお仙ぞと名乗んとせしが舗先よは多くの客の群集りお仙が容色の美のみならず女乞食を助けたる慈善の心を感賞して常さへ賑ふ境内を塡むるばかりの人立なれば今此場にて名乗あひ乞食の娘と呼るゝも母の爲には厭はねど是より店の衰微を招かば我のみ便に病臥せる父と又此母をも養育する茶代を得るの道なからんと思へば今日は此儘に還さんものと意を定め繻絆の袖もて涙を拂ひ「れまへの話しを聞て見れば物の應報はあるもので媒毒で臥ている他人の女房を振棄させて又おまへが媒毒で苦しむ今の身い憐難澁で有ふと察して黄ひ泣に涙がこぼれた昔作つた罪障も懺悔をすれゞ滅しると福泉院のお住持様も毎度お説遊ばせばれまへも心を改めて笠森様を信心したら又良い事も有ませう今お話しの様子では大坂の疊屋町に暫くゐたと有からは彼地の事は委しからふ戎橋の近所よは私もたんと知己の有た安否も聞たけれど花に出盛る店の御客が忙しい折なればおまへと話しはしてゐられぬ此二三日は降がちなれば近々の内雨が降たら申刻過に此店まで必ず尋ねて來ておくれ其時よこそ緩々と聞たい事がたんとある是は寔よ微少だが私が何かを聞日まで堂前あたりの木賃宿へ泊つて體を雨露に濡さぬやうにしておいでト惠まるゝ金を手にだに觸ず「イヱ〳〵如何して只今も振舞金を頂いたうへ又此やうな御心遣ひを頂きまを



筈はない御尋ねなさる事が有なら雨の降日に參りませうから斯な事には及びませぬと固辭をお仙は詞を盡し强て採せる包紙も涙よ濡る歎冬の數を重ねて一兩の額に驚く乞食の婆が「鍵屋のれ仙と仰しやるからは若や貴孃も大坂のト云んとする聞よれ仙は疾く鼓賀の内へ駈入ば惠まれし金を幾度か押頂きて狐鼠〳〵と稲荷の社内を出行けり

## ○第十一輯

唯さへ永き春の日を花の上野の麓ゆゑ暮殘したる黄昏どきお仙は茶店を片付て渥急戻る長家の門口太兵衛は重き癩病よ起も上れぬ布團の上よて斯と見るより腹立聲「ヱヽ何を迂路〳〵してゐたのだ如何よ店が忙しいとて此長の日を暗くなるまで大病人をお長家任せに捨て置れて堪る者かへ此親父はまゞ生てゐれば世間の人の晩食時よは腹も減れば酒も飲ハへ體の利ぬ老爺だと見侮つてか此頃では飯の世話さへ能はしをらぬ尋常の養父と違ひ我よは大事の命の親だぞ「サア其命を助けられた親なり殊にい養育の御恩もあれば是迄にれまへの詞は何なりと背いた事は無ではないかへ「イヤ喃々と口答をするな汝が幼稚でゐた時分に己も攝州西の宮の酒屋よ久しく奉公して遊び盡した引負から八月節季の懸先を集めて同家を逐電し有馬の温浴で湯女に入あげ偷むだ財布を振つた擧句本街道を出かけては追手が懸りはせぬかと氣遣ひ山の間だを狐鼠〳〵と歩行處へ盜人に蹴倒

されて轉げ落た汝を種々介抱して漸く息を吹返させ前後も揃はぬ泣ながらの話しよ容子が分つたから有馬邊に泊つてゐる親父を搜して渡さべきだが此方が人に探される暗い躰の其上に熟々視れば幼稚ながら末頼母しい縹致ゆゑ如何捨賣にして見ても育た丈の費用には利に利が添ふと踏だれば欺し賺して丹波路から京へ這入て木曾街道を連て江戸へと來る途中桶川宿の五兵衛といふ古い知己の博徒の女房が昔は江戸藝妓で田舍稼の娼妓や藝者の少女を仕込が上手ざから五兵衛よ預けて單身になり江戸へ住つて賤妻を持たが覺た職業といふはなし博奕仲間へ飛込であふら〳〵と暮すうち賤妻は病氣で死でしまひ其後來たのも二三人身持の惡いに呆れては出られてしまふた其頃に桶川の五兵衛夫婦も善ない事をしたさうだ夫婦一所よ遠島よなり汝はどこへも行方なさよ江戸へ引取福泉院の團子茶屋へ手傳に遣た時分は肩あげの有た頃だがお仙〳〵と流行に付て鍵屋といふ自まへの舗さへ出と勢ひ日錢が揚つて吉原の太夫に賣より割なれば毎度大きにゆ苦勞位な甘い詞をかけるにつけ增長したのか此頃では大病の親を鹿末にして世話もろく〳〵しねへなと危難よ遭て別れたる實親にも會せず引放し吾身の榮華を計る爲なる其惡業を恩がましく物語るころあさましけれ

## ○第十二輯



お仙は昔物語の始終を聞て涙を拭ひ「娼妓になつて大勢の客を接との勤めばかりは何卒免して下さいと詫して茶店へ出てからは笠森樣とゆ贔負のゆ蔭で少しは家の都合も能くなつて來たにつけ此强病で惱みながら惡物食と大酒で體も利なくなつたよ戀ず無理と愚痴との憎まれ口は情ないでい有ませんか何を私か增長しておまへに不孝を致しませう話すは今日が始めてながら毎朝暗い時分から長家の井戸で垢離をとり笠森樣を拜むのも病氣を直して上たいと思ふに利益は微塵もなく段々病ひの重るうへ先月廿日の真夜中にぶらりと何處へか出て行て黎明に歸つて來た日から遽に體が利なくなつたが同廿日の曉天よ笠森樣のゆ別當所へ盜入が忍び入り容子を知た者と見えてゆ裏物を入た箱を奪て行たは何とやら心掛りよ思ひますが然いふ事も有まいが萬々一よも其樣な心得違ひの不了簡を出しては罰が當りませうつひ戸口へも出ぬ病人が夜明に歸つた其時から體が利なくなつたのも不審を起せば氣に懸る若惡い事をしたのならば今の内よ懺悔してゐ詫をせねば病氣も直らず若又他から知れたなら病氣の上に年寄た體へ繩がかゝりはせぬかと私は苦勞で寐る目も寐ず三度の食事も通らぬ心配ろれや是やを考へて善心になつて下されたら病氣も直り其爲の愚痴も出まいと思ふゆゑ信心をする私が意を少しい察して見ておくれと歎く意見を皆まできかず「何だ〳〵此女は已が一晩内を明た其夜に生憎別當所の

金が紛失したからとて容子を知た者の業たと疑がはしさうな其意見は親父を賊よ陷と氣か否泥坊だと吐露のか命の命の恩を知るなら何でも應といふべきを抱れて寐ぬのは如何した者だ稼人だと一目置て下から出れば附上り親父の慾情を聽ねへのみか証據もない盗人呼はり然う悪口をぬかすなら最う生しては置れねへ覺期をしろと怒よ堪かね起れぬ腰を無理に伸し勝手よ有合ふ出刀庖丁を振廻したる狂氣の体よ「ア〻ヨ〜〜と逃ながら止るれ仙に切て懸れど素より進退不自由なる病躰なれば飄々涙々追廻そうち眩暈き塲末の長家の臺所傾きゐたる揚縁の朽たる板を踏拔て糠味噌桶に兩足を落し入たる太兵衛は其儘俯伏よなりて即死せしは疑ひ難き神罰の報いし仔細を次輯に說べし

○第十三輯

「オイれ父さん如何したのざねマァ氣を慥にお持よと抱き起せど疾絶命て惚身氷の如くなればお仙は急に驚き騒ぎ長屋の者を呼立れば差配人始め打集ひ藥よ水よと手を盡せど蘇生らぬ力なく兩足陷せし糠味噌桶より太兵衛が死骸を引出せば足に纏り顯はれしは漬物ならで小風呂敷に包みし物にて有たれば人々大きよ怪みてお仙よ問ども知らぬといふにぞ包を解て改むれば黄金六七十両程を笠森稲荷の別當所の張簿の反古に包しなれば偖は此程福泉院と入たる賊は太兵衛なるかと何も目と目を見合つ其神罰の彰々たるを感じて鳴も止ざればお仙は頻に恥入て福泉院へ人を馳せ金を返して示談を整へ太兵衛が賊の汚名を取消横死に及たる事のみを其筋へ屆け出れば檢屍は直地よ出張し一伍四什を調るにお仙が平素の孝順なるとと太兵衛が邪見の行ひを同長家より近邊まで知らぬ者なき事なれば一同お仙を憫然て皆証人に出るにぞ死躰は假に埋葬させお仙は長家の人々ともに町奉行所へ引出され太兵衛が變死の趣きを吟味の上にて判決は後日の沙汰よ及ばんとて同所よ留め置れたり却説中津の藩士今村丈之進が悴丹下は下舘より直宿を勤め當日も例の明番よて我家へ歸る途中にて山なすばかりの人立あれば何事なるやと從僕に問ば「旦那い冷存知ぐざりませんか谷中の笠森稲荷の社内で名高い美人の鍵屋のお仙が一時日の晩とやら親殺しをしたとかいふので今日裁判所へ出るのを見るとて往來も埋るやうな此混雑は物見高い江戸の慣習でぐざりまとが聞ばれ仙は親孝行で優しい者だと云まとから親殺しとは如何かいふ間違でがなぐざりませう「成程鍵屋のれ仙といふ美人の事は詰所よて同役達の話しに聞たが若親殺しが寃罪なら憫然なと語らいなから行く向ふより引れ來るお仙が憂よ沈みし体は雨に潤ふ海棠の弱げに見ゆる光最よて紅粉の力を借ず美色よ驚く今村丹下は恍惚として我にもあらず持たる扇を取落し跡見送りて立たりけり

散ぬれば後は芥となる花を思ひ知らずもまどふなる莊周の夢の蝶となり蝶の夢また周となる其忘想の覺難き朝寐の床に葡萄て見やる外構は奥平家の下館ゆゑ閑靜にて野に咲滿し蓮華草董蒲公英なり交て花の筵を敷つめし如くよ見ゆる芝生の上よ飛かふ蝶は未だ覺ぬ夢の餘波か怪しやと思ふに付て忘られぬは昨日明番歸りの途中ふと見初たる鍬屋の仙は世上の噂よ違ひなく愁ふる姿も充分なる趣きあれば渠をして喜び樂ましむる時は國を傾くるといへる譬も眞なるべきか彼と是とは雲泥にて比較にはならねども其容貌は何となくれ橘に似たる所もあり斗も亦他人に臈似ならんか吾も丈夫と生れし甲斐に斯る美人を妻ともせば生涯の望足なんと思へばお仙の面影のみ覺ても目前は在か如く餘りの想ひに堪兼て頻よ胸を焦しゝが又熟々と考ふれば美人は必ず毒ありとは比諭の如く彼れ仙も親殺しの評判ありて町奉行所へ引れたれば世よ云ふ内心如夜叉の類ひか又は世間の風説に違はず養父が貪慾邪見にて寃の罪を蒙りしか左すれば憐むべき者なり其實情は善か惡か聞まほしやと思ひ詫るをりかられ橘は一間を明け「〜ェお煎茶が出來ました唯今己刻が鳴ますよ今朝は大ろう御朝寐を遊ばしますのは汚氣分でも汚惡いのでいでざりませんかと問れて丹下は起直り「否なよ病氣ではないが一昨晩の汚酒下されよ夜が更たゆゑ其つかれで斯う日の高く昇る迄熟睡したのは面目ないといひつゝれ橘の貌を見れば何處



やらおせんに能く似たり小說稗史よも美人に會て戀慕の情を發するは花見の筵月の宴歡び樂む時の多きよ屠所の羊に異ならで廳へ引るゝおせんを見て斯まで心を動すは造化の神の戲れも新作過ると我ながら可咲き迄に想ひつゝますゝれせんを戀慕ひぬ

## 第十五輯

明るき所に法理あり暗き所よ天道有てれ仙が廳よ拘留れしも近隣の證據人の爲に全く養父は發狂の始末明かなりければ却て孝心の厚きを賞され幾程もあらずして放免と成たるにぞお仙は太兵衛が佛事を營み三七日をも果したれば未ざ忌明にはならねどもれ仙が出ねば團子も賣ず休憩人も稀なるにゞ店を預かる者よりしてれ仙に出よと進むる上に寺院の稻荷の事なれば社内よ出るも苦しからずと福泉院の免に從ひ兎角に心は浮立ねど亂し髪をとりあけて出しは卯月の下旬なるが所がらとて啼渡る山時鳥木隱れて靑葉に晴く聞ねたる汚命も晴しお仙が身は一時よ常の孝行まで世よ顯はれて又一層心も顏も美しく思はるゝとて往來の人の譽ては過る中に日參講中なんどの知己は親しくお仙を問慰め喪中看省と出勤の祝ひを兼て過分なる茶代を拂ふも多かりけり斯く入交り立代り賑ふ中に武夫のまゞ年若きが供をも從ず八丈島の袷の上よ仙臺平の袴を穿黑絽の羽織裾長く白銀作りの大小も光輝く男振は奥平家の中小性今村丹下が鍵屋の店に竹笠を脫捨て「暫く之を

預り呉よといひつゝ手水鉢に至りて口を濯ぎしうへ神前ゑ稽首つ祈念終りて鍵屋の床机に立戻れば「よう御参詣でござりまする霖雨あがりの遽天氣で俄然お熱く成ましたト常に馴たる世辭さへも初々しきに今村丹下が稀なる好男子なるゆゑ恥らふ色もあるなるべし丹下も何やら手持なき容子なりしが扇以て店の團子を指さしつ「拙者は此ごろ中國筋より參勤致した田舍武士ゆゑ江戸の勝手は存ぜねど三ッ四ッ位の小兒迄がお團子〳〵と唄ひ囃すは此供物の事でござるか何さま當家の繁昌は聞しゑ增る其上に斯る美人の給仕を取るは世ゑ難有き事なれど田舍土産に何時ぞはと樂みゐたる甲斐もなく噂ゑ聞ば何やらん災難ありて店へも出ず久しく休むでゐるとも知らず今日は出勤したであらふか翌日は店へや出んかと明番歸りに幾度も空しく足を運びしが今日といふ今日頃日來の念がト言かけて心づき餘所の話しゑ紛らせば「アレまァあんな淫戯談ばかりといふも心ある互ひの言葉うち解て此日を始めゑ今村は屢々鍵屋へ來りては長話をする其末ゑ近きあたりの割烹店なんどへ連れ仙を誘引て行などしつ花走の簪や小裂など贈て心を執ければお仙も意に憎からず想へど堅固き性質ゆゑ猥りに肌を免さねば丹下も恥て打つけに言寄る機會のなきものかられ仙が素性を深くも知らず我が契たる松嶋の娘れきつが姉なりとは彌々知る由無りけり



## 第十六輯

女姓の妬心なき者は最も以て稀なる哉却説松島市助が娘おきつい母諸ともに丹下ゑ從ひ江戸へ下りて今村方ゑ同居しつ馴るるに從ひ何時しかに丹下と睦み語ひしを母のれ嘉代い小兒の如く思ひてさる事情の有とも知らず丹下に傅きゐたりしに此頃よりして明番の途より供の下部を歸し何方へやら遊び歩行夜更て戻る事さへあれば れ嘉代は頻りに心配して異見を加へ出先を聞ば同僚中の交際に谷中の妓樓へ連られて迷惑ながら常ゑは飲ぬ酒を强られ醉倒れて深夜ゑ歸る事もありと前後も揃はね遁辭を訝る嘉代は丹下の留守に供の下部を招近付け「此頃旦那は御同役の交際とやらで三日ゑ擧ず谷中へ行とやら仰しやれど立派な御方が打揃ふてお遊びならば吉原か深川へれ出が有べきに谷中あたりの安店へ何故れ通ひなさるのやら御兩親からしつかりと預つて來た丹下樣身持を崩そのみならず黴毒でも感染なされたら如何言譯がなるものぞ若旦那の誘引出す惡い朋友は何方かと聞ば下部は打笑ひ「イヤ〳〵夫は大違ひお前の眼からはまだ坊ちやんざと思ふで有らふが丹下樣は中々の通客で谷中へ行と仰しやるのは實は傾城狂ひでなく花走唄にも謠れる笠森稻荷の團子茶屋のお仙といふ評判娘を途中で見初て何時のまゑか手製で深い中となり大逆上で双方が熱い〳〵の大評判をお前は今迄知らずかと口はしたなき下部の語を

聞てお嘉代は彌々驚き「扨は然云内惜有て谷中へ行と仰やるのか藝妓や娼妓と異はり素人めかした茶屋女の化物なんぞは猶更瞼難悪い足でも有時は第一御身に疵が付と言ば下部は頭を振り「イヤ〳〵お仙ゑ限つては親孝行で優しい者だと御奉行所でも賞られたとやら其心配は御無用といへどもれ嘉代い心の濟ねば顔見たばかりで善悪の分らふ樣は無れども評判娘の事なれば鍵屋へ立寄若旦那を欺そか但しは眞實かの容子を密に探らむと思ふ仔細を何心なくお榻に相談したりしかば幼弱ながらも我思ふ丹下を寐取る戀の仇憎さも悪し腹立しと胸は燃せど母の前を兼て何とも岩橋の夜の契も絶んかと丹下を怨みお仙を憎みともに谷中へ行んと乞ふにぞ丹下の前へは買物ゑ行と稱して屋敷を出谷中へ趣く途中ゑて白雨強く降ければ頼みも軒の笠森の神社へ着しは永き日も黄昏近きころなりけり

## ○第十七輯

急がずば濡ざらましを旅人の跡より晴ると詠じけむ道灌山も程近き谷中ゑ於て白雨に遭たるれ嘉代お榻の二個は女の足の捷どらず漸にして鍵屋の店へ來りし頃は日も落て他ゑ參詣の客もなくお仙一人が店先を片付いたる時なりしが素より客に愛想よきお仙は顔も嬋娟ゑ「今の雨ゆゑ召物も大ふん濡て嘸汚難儀外にお客も汚座りませねば汚身帶を汚解



なされて火鉢で少し乾かしてれ出なされと懇篤ゑ世辭も賢く汲て出す茶碗をれ嘉代は採乍ら差出す黒の塗盆に寫るお仙とおきつが面を一度に吃度見合せて「テモマア好似た二人の容貌おきつは田舍育故粧色も野暮なり色も黒く美人と世間で評判のお仙どのには立併ばねど眼元鼻筋唇の薄くて前齒の細さまでが瓜を割たといふやうな二女の面を斯う一ツに寫せば如何やら姉妹ではないかと思ふ心當りが此方ゑいないともなけれども他人の虚似といふ譬へもあれば若違ふたら免して下されお仙どの貴孃は播州姫路の人で大坂に居た忠右衛門といふ人の娘にて有馬の湯場で幼いとき災難に遭た覺えはないかト聞れて愕然手に持し盆を碾と取落し「成程それは仰しやる通り貴君方は如何なされて吾儕の素性を汚存じかと膝を進めて問詰れば お嘉代は涙を拭ひつゝ「貴孃は妹のある事を今まで夢にも知るまいが汚實父の市助どのが亡なる日迄も貴孃の事を苦勞ゑしていたお仙どのかコレ〳〵れきつ此人がお前の姉樣ぢやぞいのトいはるゝ仔細を知らざればれ仙い夢の如くにて「和儕ゑ妹はない筈と思ふていたに此孃樣を妹と仰しやる而已ならず亡なつた市助どのと仰しやるからい日頃から會たい見たいと焦れたるお父さんは其後に此孃が出來て死んでかと先だつ物は涙なる仔細を委しく尋んと膝を進むる折しもあれ先頃金を與へたる女乞食は鍵屋の店へ要事あり氣に來かゝりしが客の前をば憚りて鼓賢の後へ身を

隱しお嘉代とおせんが問答ヨ耳を峙て聞居たり

## ○第十八輯

其時れ嘉代は容儀を改め「仔細を話さず突然に姉ヨ妹といはれては不審ヨ思ふは最も至極貴孃が有馬で災難に遭ふて別れた父さまの忠右衛門殿の後妻のれ嘉代といふい私が事話すも涙の種ながら其い斯々云々と奥平家の藩士今村丈之進が情ヨ因て忠右衛門は同藩の足輕松嶋家の入夫と也市助と改名しおきつを生して死去せし事より臨終の際までお仙が事を心ヨ懸て慕しに依りおかよは女のれきつと共ヨ丹下ヨ從ひ江戸屋敷へ下向したるを幸ひに大都會の事なれば若やお仙が生死の程を聞知る便もあらんかと寄々尋ねたる事迄漏さず語聞せければお仙は始終を聞く事毎に涙ヨ袖を浸しつゝ「偖は年來和儕も生死の程を氣遣しお父さんは武家方へ執立られて妹迄出來たは目出度果報餘つて過去られたは最惜い今迄無事で在たなら親子姉妹打揃ふて此對面を祝はふに便ない身の履歴をも一通り聞て下されとて實母れかのが姦通したる六藏と遁亡せしより不幸續きて忠右衛門が病を治せむとお仙を伴ひ有馬の湯治へ趣く途中六甲山にて賊ヨ出會ひれ仙が溪間へ蹴落されしを助けし養父鍵屋太兵衛は非義非道の惡人ヨて尋る親ヨ面會させず桶川宿の五兵衛が許へ生長する迄預けられし五兵衛夫婦も騙の科にて遠島ヨ處せられし後に江戸へ來



りて笠森の茶汲女ヨなりたる事より太兵衛は重き癩病に罹ながらも惡業止ず別當所の金を盜み剩へれ仙に迫りて孝子を苦めたる上に發狂して死たれば親に刄向ふ疑ひを蒙り町奉行所へ引れしより却て日頃の孝心顯れ漸く此頃出勤せし長物語の顚末を泄す事なく語ければ互ひヨ寄遇を感じつゝお嘉代は尙も膝を進め「貴孃をおきつの姉さんと知ぬ間こいと云はへに云ぬとさつも妹姤を愧ぢ差俯向て在けれどおきつの姉と聞ば今まで憎むだが面目なでいたとあるは此頃吾儕が御贔負を受て度々御來臨のある丹下樣と吾儕とが內情でも有と疑ふて大切の旦那を欺しもすると思召てのれ怨恨か其事ならば今爰の笠森稻荷の神誓て唯御愚負になるまでなれゞ如何ぞ安心なされてと曇らぬ詞ヨ疑ひは夕陽天ともに晴ゆきてお嘉代はます〳〵堅固なるれ仙が志操を賞しけり

## ○第十九輯

れ嘉代とお仙が過來話しを茶店の後に立聞せし婦乞食は思はずワット一聲泣出せば驚き振向くれ仙が裾ヨ身の穢さも打忘れ縋付て涙にくれ「ァゝ恥かしい〳〵此体をして娘とはいひ憎けれど先達ても貴孃の方では實の母と察すればころ金を惠み雨の降日の夕方に來れば問たい事が有との詞ヨ任せて此方でも若や夫かと思ふにつけ雨の降日の晩方ヨ幾

度となく來て見れど生憎會ぬ其故に新米行とも上の駕さし仕[illegible]
られたとかの評判は虚か實か聞紀さふと思へど斯な身を恥て晝間は近所へ來もせねで今
日はからずも白雨に日も暮かゝる仕舞際他に聞く人もないならば母といふのも氣の毒な
がら是迄の罪を詫び忠右衛門殿も一所よかと聞ふと思ふて松島の未亡人の話しよ引續き
れ仙が年來艱難の中でも悪い養父に孝を盡した忠操を聞て彌々此身を愧穴へも這入たい
思ひを面も冠らず出て來たは幼い時から艱難させたも皆此かのが悪いゆゑ重なる罪を詫
入る了簡我子ながらも是此通り手を合せて拜みます如何ぞ堪忍して下されと大地よひれ
伏し悔歎けば孝心厚きお仙ゆゑ穢き母の襤褸に取つき「過去た事は夫迄にていふて皈ら
ぬ詫には及ばぬれ懐愛やと手を採てともよ泣入る實母實子異母の姉妹後家同士が八ッの
袖を絞りしは實に不思議の奇遇にて是も年來信仰せし笠森稲荷の應驗ならむと各々社殿
を伏拜み喜び涙よ咽びたる長物語に日は暮し闇を便に見苦しきれかのが衣服を脱捨させ
お仙が着換の浴衣を與へて其夜密に三崎の住居へ連て戻りければ嘉代はお櫛を伴ひて
屋敷に歸り有し次第を丹下に委く物詰れば丹下は夢の覺たる如く親族再會の奇遇を感じ
傍倖よしてれ櫛が姉と契らざりしを可なりとし是よりお櫛を本妻の如くに愛してお仙と
も同胞の如く交りしがおかのは老ての難病に幾ろの艱苦を重ねしうへお仙に會たる喜び



にて氣抜のせしや三崎へ引取られたる三日目よ遂よ空しく成ければ孝心無類のお仙ゆゑ
頻りに歎き悲めるを丹下は種々慰めて佛事の費用も多分よ贈り福泉院へ埋葬して跡懇ろ
よ吊ひけり

## ○第二十輯

今村丹下は若年ながら父丈之進が性質よ似て慈善の心深かりければお仙が養父太兵衛の
爲に幼年よりして苦められ偶實母れかのに逢しが幾日も非ず死たればおせんが便なきを
深く憐み茶店を引せて相應の縁に附んと計りしがれ仙は長き歳月を一日たりとも安んせ
ず艱苦を嘗て育ちたれば尋常の商家なんどに嫁して家事の苦勞を爲んより養父と言實母
と言心良からず生涯を果し、も亦身に係る宿業ならんと思ふにぞ二個が菩提を吊ふ爲に
尼よならんと望めるを丹下は種々慰さめ諭し薙髪の念を漸く止めて猶笠森の茶店よ在し
が今村丹下も江戸表よ三ケ年の在勤を果し中津へ歸國の命を得たれば櫛母子を從へて
歸ると聞よりれ仙もともに實父の墓參よ伴ひてよと望むに任せ住馴た江戸を旅立て大坂
表よ五六日滯留しつゝ其許這許と見物をさするうちれ仙ハ幼かりしとき大坂市中を四里
餘隔し直上村の農家なる米澤某氏方へ里に遣れて養育されし昔の恩を忘れねバ丹下よ乞

こ兄と稱へし悴喜助が生長て篤實温行なる者なれば農事を勵みて家産を殖し雇夫をも五六人召使ふ身となりたれども良縁なくして今迄も定まる妻の無りければお仙を嫁こ呉よといふ老人夫婦が强ての頼みにお仙も昔の忍ばれて身一人江戸こ立戻り憂年月を送らむよりは寧田舍にすま居して安樂に生涯を過さんといふ願ひに依り縁談頓に整ひて一度中津へ赴きて父の暮參を果しゝ後に丹下はれ橘を本妻とし妹夫婦の媒妁こてお仙は喜助の妻となり男女夥多の子を儲け益增家當榮えしがお仙は意こ思ふやう多年辛苦の間にも慈善を好みし報いにや思ひがけなき天縁にて斯る豪家の妻となり衆くの小兒が痘瘡も輕く濟しゝ而已ならず胎毒なんどの患ひなきも笠森稻荷の利益なれば住居近くへ社を營み旦暮に敬拜せばやと志願の旨を良夫に語り遂こ一社を建立せしは今尙同村中に在て靈驗廣大なりと聞り却説江戸谷中天王寺中の福泉院に安置せし笠森稻荷大明神は本体立木の觀音なれば維新以降陀枳尼尊天と改稱ありて明治四年天王寺を始として境内五ケ寺を廢せらるゝに臨み程近き上野櫻木町なる養壽院へ笠森の本尊を遷せしに信心の輩衆さを以て毎年八月廿二日ろの祭典を執行ひ彌々繁昌そるとかや此物語の記者種彦偶々有馬の温泉より大坂府下に再遊して嶋上郡眞上村こ笠森稻荷のある事を知り併にお仙が經歷の諧談社會こ傳ふる所と大いこ異るを聞得たればお仙が終身賢貞なるを幼婦の鬼鑑となさんとてかくとぞ



一舍時雨の笠森　終

明治三十二年六月　印刷
同　年六月八　出版

定價金四十錢

發行者　日吉堂　菅谷與吉
神田區元岩井町三十七番地

印刷者　龍雲堂　大塲沃美
神田區柳原河岸第十一号地

發賣

上田屋榮三郎　内藤加我
大川屋錠吉　井上勝五郎
辻岡屋文助　明進堂
山口屋藤兵衛　木屋宗次郎
鶴聲社　近江屋園吉

特49
895

一舎時雨の笠森

国立国会図書館

091309-000-7

特49-895

一舎時雨の笠森

日吉堂

M22

DBN-2187